

《書評》大出敦『余白の形而上学：ポール・クロードルと日本思想』

学谷，亮
中央大学文学部：准教授

<https://doi.org/10.15017/7402162>

出版情報：Stella. 44, pp.69-74, 2025-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン：

権利関係：



《書評》

大出敦『余白の形而上学——ポール・クロードルと日本思想』¹⁾

学 谷 亮

ここ 20 年ほどで、我が国におけるクロードル研究は長足の進歩を遂げたといつてよいだろう。その立役者の一人が、本書『余白の形而上学——ポール・クロードルと日本思想』（水声社、2025 年 3 月）の著者、大出敦氏であることは疑いようもない。ステファヌ・マラルメ研究から出発した大出氏は、中條忍氏らとともにクロードルの滞日年譜編纂を手がけたことをきっかけに²⁾、徐々に研究の軸足をクロードルへと移してきた。2018 年のクロードル生誕 150 年記念行事では企画委員会事務局長を、2022 年からは日本クロードル研究会会長を務めるのみならず、これまで 2 冊のクロードル論集の編纂を手がけるなど³⁾、活躍を続けている。

本書は、大出氏にとって初めての学術的単著であり、前述の論集や雑誌にこれまで発表された 7 篇の論攷をもとにしている。しかし、「マラルメの「詩の危機」ほどではないが、元の論文を大幅に書き換え、分割し、組み替えてしまっているので、面影がまるで残っていないものもある」(391 頁)⁴⁾と著者自身が語っていることから分かるように、本書は単なる「論文集」ではない。7 篇の初出年は、最も古いものが 2007 年、最新のものが 2023 年と、実に 15 年以上の開きがあるが、大出氏はこれらを大幅に加筆し、配列に工夫を凝らしつつ巧みに再編することで、ひとつのストーリーを描き出すことに成功している。評者は、本書のもとになった大出氏の論攷はすべて初出発表時に読んでいた。しかし本書を通読して得られたのは、そうした個々の論攷を読んだときとは全く異なる読後感であった。単独の論攷では浮かび上がってこない、クロードルの日本文化理解を貫く一本の線が見事に引かれているのである。

序章と終章を含めると全部で 12 の章からなる本書の企てをあえて一言で要約するならば、「クロードルはいかなる解説格子によって日本文化を読み解いたのか」を明らかにするものだと言えよう。そこでまず問題になるのが、「非物質的

な形而上的存在」，すなわち「知覚できないがため言語化も認識もできないが，確かに存在する〈何か〉」（12 頁）を肯定し希求する，クローデルの態度である。パリで青年期を過ごした彼が，この都市を「唯物論の徒刑場」と呼んで忌避していたことはよく知られているが，実際に第三共和政期のフランスでは，「世界は経験主義的に認識され，世界を構成するのは知覚され得るものだけであり，経験世界の背後に神などの超越的な実体を認めない，一種の反形而上学」（31 頁）が幅を利かせていた。他方で，当時はジャポニズム全盛の時代であり，日本は「フランスの，いやヨーロッパの文化体系には見出すことのできない異質性そのもの」として認識され，一種の「特権的な地，芸術的ユートピア」（52 頁）としてクローデルの目に映った。彼は，外交官という職業を選択したことにより，この地に足を踏み入れることが叶ったのである。

だが，なぜ日本が，「形而上的存在」の探求において重要だったのか。「比喩と論理学」と題された第 2 章で，大出氏はその手がかりをクローデル初期の理論的著作『詩法』（1907 年）に見出している。その第一部「時の認識」の最終章「時間について」の終盤，クローデルはやや唐突に，上海領事館に勤務していた 1898 年 6 月に休暇を利用して日光・中禅寺を訪れた際の体験を語る。「かつて日本で，日光から中禅寺まで登っていった時，遠く隔たっていたものの，私の視線のまっすぐ先に並んで在る楓の緑が，一本の松によって提示された調和の欠けた部分を満たしているのを見た」（69 頁）という謎めいた一節を，大出氏は丁寧に読み解く。「楓の緑が，一本の松によって提示された調和の欠けた部分を満たしている」光景は，「ある意味で欠けたものを抱えた部分が集合して，お互いに欠けているものを補いあうことで全体の調和が満たされること」（70 頁）を意味し，クローデルはそこにアリストテレス論理学とは異なる「新しい論理学」を見出す。そこで重要になるのが，「^{メタファー}比喩」である。彼にとっての「比喩」は，修辞学的な文彩にとどまるものではなく，「この世界に生じてくるすべてのものによって用いられる，もとからある技法」（82 頁）に外ならない。さらに，「クローデルは比喩のなかでも，とりわけ下位概念によって上位概念を表す場合に用いられる提喩を念頭においている可能性がある」（82 頁）と大出氏は指摘する。クローデルが目にした松と楓はまさしく「比喩」として機能しているのだが，それらによって表される「上位概念」に相当するものを，彼は「統辞法」と呼ぶ。通常，「統辞法」とは，「具体的な発話の背後にあって，それを言語として理解でき

るようにしてくれる規則」を意味するが、クローデルはそれを「世界理解の装置に拡大しようとしている」(73 頁) と大出氏は言う。「松と楓が作り出していた調和」は、彼にとっては偶然の産物ではなく、「われわれの知性を遥かに超え、意識すらされない統辞法があつて、必然的にそうなっている」(74 頁)。すなわち、松と楓という「比喩」は、「個々の世界の現象という部分を通して、通常、描き出すことも記述することもできないこの世界の全体的なもの——ここでは「全的なもの」である「原因」——があることを認識できるようにする」(82 頁) 機能を持つのだ。

以上、第 2 章の議論の核心をごく簡単に要約したが、クローデルが愛読したアリストテレスやトマス＝アキナスの思想を絶えず参照しつつ進むこの章は、哲学に疎い評者にとって本書中で最大の難所であった。だが、読者諸氏にはぜひこの章を辛抱強く読み解いていただきたい。第 3 章以降では、1921 年に駐日大使として来日したクローデルが日本文化をどのように解釈したかが検証されるが、その解読格子のライトモチーフはすでに『詩法』において示されていたのである。したがって、第 2 章の議論を正確に理解することが、本書全体を貫く一本の線をたどるうえできわめて重要だと言えよう。「統辞法のように初めから在るにもかかわらず、意識に現れてこないものであり、さらには直接、記述できないもの」、謂わば「世界を包摂する全的なもの」(83 頁) を眼前の事物という「比喩」を通して認識することが、クローデルの「形而上学」の根幹をなす発想であり、彼が日本文化を語るときは常にこのことが問題となる。

クローデルが関心を向けた日本文化は、神道・仏教・能・文楽・水墨画・俳諧と多岐にわたる。一見すると、限られた日本滞在期間中に、つまみ食いの様々なものを摂取したようにも受け取れよう。しかし、「世界の背後で、われわれの経験世界とは別に存在し、われわれに意識されないままに関与している」(85 頁) とされる「全的なもの」への探求をクローデルは絶えず続け、様々な日本文化のなかにこの「全的なもの」を見出していったというのが、本書のもたらした新しい発見である。これにより、クローデルが日本で執筆した様々なテキストの間に、有機的なつながりが見えてくる。他方で、この種の論法には、それぞれのテキストがある共通の構造に支えられていることを指摘するだけで終わる危険性もある。だが本書は、そうした「金太郎飴」的な凡庸さとは無縁であることを強調しておきたい。それを可能にしているのは、大出氏による厳密かつ

丁寧なテキスト読解である。本書を丹念に読み解いていけば、様々な日本文化にふれたクローデルが、可視的世界の背後にある「全的なもの」の認識という共通の解読骨子を用いつつも、論じる対象に応じてそれを微妙に変化させていることに気づかされよう。例えば、クローデルが神道や仏教——ただし彼の捉えた仏教は老荘思想の接ぎ木を経たものであることに注意しよう——の本質とみなしたのは、前者は「知性では到達できないすぐれたもの」(99頁)、後者は「無規定・無限定の超越的一者としての「無」」(153頁)と、ともに概念知による把握を逃れるものであった。他方で、日本の伝統演劇の舞台に接した彼は、能においては「肉体を失った魂の言葉にならない意志を伝える」(200頁)存在としての前シテに注目したり、文楽における三味線方の音楽や呻き声に「認識できないものの間違いなく在るものを、認識できるものに変換する媒体」(223頁)としての役割を見出す。これは、無限定なものが確かに存在することを、何らかの媒体を通じて認識しようとする態度だと言えるのだ。クローデルにとってこれは、日本文化理解の枠組みでありながら、同時に文学に直結している。能や文楽に熱中する以前に執筆され帝国劇場で上演された舞踏劇『女と影』にも、「紙の帷を挟んで霊の世界と現実の世界を舞台上に併存させる」(167頁)演出があり、それによって「憑依した「影」が、「女」を通して自分の存在を認識させ、何かを伝えようとしている」(179頁)ことから分かるように、クローデルにとっての文学とは、「この無限定のものを変換し、媒介することができるもの」(223頁)に外ならなかった。大出氏は、この点にこそクローデル文学と日本思想との接点があると看破したのである。

そして、この「無限定のもの」は、本書のタイトルにも含まれている「余白」の概念と結びつく。日本滞在中、浮世絵よりもむしろ水墨画に惹かれたクローデルは、「日本画とは無としか表現できないものを浮かび上がらせる非写実的絵画である」(247頁)と考えた。彼にとっての「余白」とは、「何ものでもないが、何ものでもあり得るもの」、「人間の認識から独立し、無関係であったため、言葉や概念で描き出したり、表象したりしようとする考えなかったものの姿」(249頁)なのである。重要なのは、この「余白」が持つ創造的役割であろう。竹内栖鳳が描いた樹木を主題とする水墨画を見たクローデルが、「此隙間に蝶の形が3つある所がいい」と画家本人に語ったエピソードから、「描かれた樹木が、何も描かれていない余白を媒介して関係付け、クローデルの精神のうちに「蝶」を現

前させた」(248-249 頁) とする解釈を大出氏は引き出している。こうした発想が、アルファベットの文字の形に意味を見出そうとした「西洋の表意文字」、さらには短詩集『百扇帖』で実践された特異な分綴法へとつながってくるのだ。これらの作品で、クローデルは文字や記号そのものに注意を向けているが、そこには予め何らかの意味が内包されているのではない。「文字あるいは記号には何も隠されたものはなく、その文字あるいは記号の後から意味あるいは観念が生じる」(291 頁) というのが彼の立場である。つまり、在るものが「媒介」となって、「余白」から新しい意味や観念を生み出すことこそが、クローデルが日本で実践した文学なのだと言えよう。終章では、実はこの「媒介」が「極めてヨーロッパ的であり、そしてまたスコラ学的であると言える」(294 頁) 概念である〈しるし〉を着想源としていた可能性が指摘される。スコラ学の強い影響下で書かれた『詩法』にこそクローデルの日本文化理解の鍵があるとする大出氏の見立ては、やはり正しかったのだと言えよう。

クローデルは日本語を解さなかったため、その日本文化理解は、フランス語や英語で書かれた書物に負うところが大きかった。まず重要なのは、彼が参照し得たものをできる限り特定することであるが、大出氏は、前述の滞日年譜編纂を通して培ったと思われる広範かつ隙のない文献調査により、それを見事に実現している。だが、それだけにとどまらず、そうした先行テキストをクローデルがどのように読み換えていったのかが逐一明らかにされ、彼の犯した「意味のある誤読」が解き明かされているところに、本書の魅力があると言えよう。長年にわたり我が国のクローデル研究を牽引した故渡邊守章氏は、作家の生誕 150 年を期に行われた対談で、「クローデルが日本のものを面白いと思った時に、どういう背景があって、あるいはどういう経験があって、それを面白いと思うのかということの追求や分析は、まだ少ないと思う」⁵⁾ と発言しているが、本書は故人の期待に十分に応えていると思われる。

ところで、大出氏が初めて世に問うた単著は、『クリティカル・リーディング入門——人文系のための読書レッスン』と題する、人文学分野のテキスト読解法を指南する教育的著作であった。そこで氏は、「クリティカル・リーディングとは、単なる批判でも、重箱の隅をつつくことでもなく、テキストをわれわれが当たり前と思っている常識とは別のものに読み換えることである」⁶⁾ と記している。この教育的配慮に満ちた書を今日まで愛読し続けている評者としては、そ

こで大出氏により定義された「クリティカル・リーディング」が、『余白の形而上学』で見事に実践されているという印象を受けた。じっさい本書では、これまでのクローデル研究の「常識」を覆す解釈がいくつもなされているのである。さらに言えば、本書で大出氏が試みたのは、日本文化を対象とするクローデルの「クリティカル・リーディング」の営みを、可能な限り忠実に再現することだったとは考えられないだろうか。氏が終章に書き記した、「日本がクローデルにもたらした最大のものは、〈しるし〉を通して無としか表現できなかったもの、あるいはそれまでなかったものを概念化することであり、それは本来、この概念世界とは無関係な世界を人に関連づけることである」(304 頁) という一節を読みながら、これは「クリティカル・リーディング」のあり方そのものではないか、そう思わずにはいらなかった。

註

- ＊) 本稿の執筆にあたっては JSPS 科研費：課題番号 24K16039 の助成を受けた。
- 1) 本稿の執筆に先立ち、主として一般読者を想定した同書の書評を『図書新聞』に寄稿した。本稿の内容には一部これと重複する箇所がある。『図書新聞』3705 号, 2025 年 9 月 27 日, 4 頁参照。
- 2) 中條忍監修, 大出敦・根岸徹郎・篠永宣孝編『日本におけるポール・クローデル——クローデルの滞日年譜』, クレス出版, 2010 年。
- 3) 大出敦・中條忍・三浦信孝編『ポール・クローデル 日本への眼差し』, 水声社, 2021 年。大出敦編『クローデルとその時代』, 水声社, 2023 年。
- 4) 以下, 本書からの引用は括弧内に頁数を示す。
- 5) 渡邊守章・石田英敬「対談『繻子の靴』のアクチュアリティ」, 『三田文学』第 136 号, 2019 年 2 月, 106 頁。
- 6) 慶應義塾大学教養研究センター監修, 大出敦『クリティカル・リーディング入門——人文系のための読書レッスン』, 慶應義塾大学出版会, 2015 年, 8 頁。